様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７００７５

研究課題名（和文）映像文化史の構築：複合メディア環境におけるスクリーンの遍在を理解するために

研究課題名（英文）Constructing the History of Screen Culture: Understanding Ubiquitous Screens in the Multi-Media Environment

研究代表者
大久保　遼（Okubo, Ryo）

愛知大学・文学部・助教

研究者番号：６０７１３２７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀末の映像文化について歴史的な調査を行い、映画前史の投影装置や上映形態の詳細を明らかにした。その成果については研究書を刊行するとともに、博物館での展示やカタログの刊行、復元上映会を開催することで、広く一般に公開するよう努めた。また歴史研究の成果を、現代のメディア環境における多様な映像の形態の分析と合わせることで、映画史やテレビ史といった個別メディア史に代わる「映像文化史」の枠組みを示すとともに、新しい映像研究の方法の提案を行った。

研究成果の概要（英文）：The outcomes of this research project are as follows: (1) Revealing the details of projection devices and projection forms of nineteenth-century Japanese screen culture based on historical research; (2) publishing books such as “Archaeology of Screens in Early Modern Japan”; (3) holding an exhibition and a screening and publishing an exhibition catalogue in order to open these research achievements to a broader audience; (4) constructing the “history of screen culture” instead of individual media history, such as film history or television history; (5) and suggesting methodology for the study of various screens within the recent media environment.

研究分野：メディア研究

キーワード：メディア論　文化社会学　映像学　映像文化史　スクリーン　メディア考古学

１．研究開始当初の背景

現在、映像はますます多様化し、さまざまな形態のスクリーンが日常生活に遍在している。屋外に設置された大型スクリーンや各種映像広告の増加だけでなく、パソコンやタブレット PC、携帯電話・スマートフォンの普及により、私たちは日常的に通信機器と一体化したスクリーンを携帯して歩くようになった。またたとえば、2000 年代半ば以降に一般化した、様々な形態の映像配信サービスの展開を加えても良いだろう。

現代においてスクリーンは、デジタル化された情報が流通する際の主要なインターフェイスとなっており、日常生活だけでなく、テーマパークやミュージアム、教育や報道、ビジネスや医療の現場においてさえ、映像による情報の視覚化の諸技術は欠かすことかができない。各国の都市の街頭に設置された巨大な LED スクリーンや、世界各地でのスマートフォン、タブレット PC の 急速な普及からも分かるように、こうした光景はグローバル化した都市空間において共通の経験を構成しつつある。映像とその基体としてのスクリーンは、テクノロジーとサイエンス、トランスナショナルな資本と情報の流通、複合化する情報産業と都市のアーキテクチャが交錯する場所であり、そして重要なことに、それらの諸力が私たちの身体に働きかける接点となっている。

こうした映像の多様化とスクリーンの遍在という状況を前にして、近年のメディア研究においても映画やテレビだけを映像の特権的なモデルと考えることができなくなっている。したがって、映画・テレビにととどまらないより多様な形態の映像を既存の映画理論、メディア研究、あるいはより広い日常生活の文化研究の文脈に位置づけることが必要と言える。

２．研究の目的

本研究では、こうした多様な映像の上映形態を「映像文化（Screen Culture)」と捉え、これを映画・映像研究のみならず、メディア研究や文化史の文脈に位置づけることを目指す。この作業を通じて、本研究は、現代の映像環境の創発地点のいくつかが 19 世紀転換期に集約的に表れていることを明らかにすると同時に、過去と現代の映像文化を対照することで、現代社会における「スクリーンの遍在」を分析する際に有効となる視座の構築を図る。

現代の「映画以後」とも呼ばれる映像の多様性はデジタル化以降に進展した事態と言えるが、しかしながらそれを全く新しい現象とみなすことは早計である。現代の「映画以後」の状況のみならず、「初期映画」や「映画以前」の時代にもまた多様な映像文化が存在したからだ。たとえば、映画以前には幻燈（magic lantern）と呼ばれる映像の投影装置が存在し、この装置は 19 世紀転換期の日本で全国的に流行するとともに、娯楽だけでなく、教育、報道、広告などに用いられた。また 1920 年代までの初期映画は、弁士の語りやパフォーマンス、ジオラマなどの興行とともに上映されるなど、現在の映画にとどまらない多様な上映形態を有していたことが知られている。こうした「映画以前」「初期映画」の時代の多彩な映像のあり方こそ、「映画以後」とも呼ばれる現代の映像を分析する際のモデルとなる可能性を有している。

３．研究の方法

以上のような研究課題を遂行するために、本研究では、19 世紀転換期の多様な映像文化に焦点を当て、当時の投影装置や上映形態を歴史的な調査により再構成するとともに、その位置づけや意義について、メディア論・社会学の視点から分析を行った。

まず映画前史のプロジェクション・メディアである「写し絵」と「幻燈」に注目し、その映像文化としての特徴と、多方面にわたる利用の広がりについて分析を行った。また、初期映画の時代の映像文化、とりわけ「連鎖劇」と「キネオラマ」といった他の大衆文化やメディアとの領域横断的で多様な上映形態について調査を進めた。さらに映画前史・初期映画の時代の映像文化の分析に加えて、「映画以後」の現代の多様なスクリーンの形態について分析を行い、最終的には、映像文化史の枠組みに基づき、映画研究やテレビ研究の方法を発展させることで、新しい映像・メディア研究の方法の構築を目指した。

４．研究成果

各年度の主な研究成果は以下の通りである。

・平成 26 年度

(1) 写し絵・幻燈の調査：早稲田大学演劇博物館等に所蔵されている写し絵・幻燈の調査を行い、また合わせて関連資料の調査を行うことで、投影装置の特徴と同時代の視覚文化に与えた影響を明らかにした。

(2) データベースの公開：演劇博物館所蔵の幻燈スライドについて調査した成果の一部は、演劇博物館デジタル・アーカイブ・コレクション内の「幻燈データベース」に反映させ、公開した。

(3) 研究成果の刊行：博士学位論文の成果と平成 26 年度の調査結果を合わせ、『映像のアルケオロジー：視覚理論・光学メディア・映像文化』（青弓社）を刊行した。また演劇博物館での調査の成果を踏まえ、共編著『幻燈スライドの博物誌：プロジェクション・メディアの考古学』（青弓社）を刊行した。

・平成 27 年度

(1) 写し絵・幻燈、連鎖劇の調査：引き続き演劇博物館所蔵のスライド資料の調査を行うとともに、博士論文では検討できなかった各地の連鎖劇の上演の実態について調査を行なった。
(2) 展覧会の実施：これまでの研究成果を全面的に活用し、早稲田大学演劇博物館において、「幻燈展：プロジェクション・メディアの考古学」を企画、4 月から 8 月にかけて開催し、研究成果を広く一般に公開した。過去の映像文化の資料展示だけでなく、プロジェクションの仕組みを用いた現代のメディア・アート作品の展示も行うことで、映画以前／以後を横断する「映像文化史の構築」という本研究課題のコンセプトを展示という形で明示することができた。
(3) データベースの改善と復元上映：調査結果に基づき「幻燈データベース」のデータの更新と公開を行なった。またデジタル化したスライドと演劇博物館所蔵の資料に基づき、当時のスタイルでの復元上映を行い、資料ベースの調査では明らかでなかった、パフォーマンスとしての映像文化の特性や詳細が判明した。
(4) 研究成果の刊行：平成 27 年度までの成果をまとめ、西垣通・伊藤守編『よくわかる社会情報学』（ミネルヴァ書房）、石田英敬・吉見俊哉・マイク・フェザーストーン編『デジタル・スタディーズ 3　メディア都市』（東京大学出版会）に論考の寄稿を行なった。

・平成 28 年度
(1) 19 世紀映像文化史の調査：前年度までに引き続き、早稲田大学演劇博物館に所蔵されている 19 世紀のプロジェクション・メディアの調査を行い、特に演劇やパフォーマンスとの関係に焦点を当て分析を進めた。
(2) 現代のメディア環境における映像の分析：日本科学未来館、インターコミュニケーションセンター、東京都写真美術館、国立新美術館、インターメディアテクなどの施設において、映像とその基体としてのスクリーンが展示や情報の視覚化にいかに用いられているか調査を行なった。
(3) 研究成果の発表：これまでの調査結果をまとめ、映像文化史の研究方法や、映画・テレビなど個別の映像メディアを前提としない映像研究、スクリーン・スタディーズの方法について、成果の発表と公開を行なった。具体的には、マス・コミュニケーション学会メディア史部会、表象文化論学会、Association for Cultural Studies 年次大会等で研究報告を行い、『映像文化の社会学』（有斐閣）に 2 本の論考を、学会誌『映像学』に調査結果を踏まえた書評論文を寄稿した。
(4) 学会奨励賞の受賞：初年度までの成果に基づき刊行した『映像のアルケオロジー』が日本社会学会第 15 回学会奨励賞（著書の部）を受賞した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）
① 大久保遼「チャールズ・マッサー著、岩本憲児編・監訳、仁井田千絵・藤田純一訳『エジソンと映画の時代』（森話社、2015 年 4 月）」『映像学』96 号、2016 年、149-154 頁（査読あり）
② 大久保遼「早大演劇博物館の幻燈・スライド資料保存について」『ネットワーク資料保存』110 号、2015 年、1-3 頁（査読なし）

〔学会発表〕（計　5 件）
① Okubo Ryo, “Japanese Screen Culture in the Nineteenth Century,” Crossroads in Cultural Studies Conference 2016, University of Sydney, (Sydney, Australia), 2016. 12. 15
② 大久保遼「『映像のアルケオロジー』を振り返って」日本社会学会第 89 回大会、於九州大学（福岡県福岡市）、2016 年 10 月 8 日
③ 大久保遼「明治初年のスクリーン・プラクティス：映画前史における上映の諸問題」表象文化論学会 11 回大会、立命館大学（京都府京都市）、2016 年 7 月 10 日
④ 大久保遼「メディア考古学の展望」マス・コミュニケーション学会（メディア史部会）、同志社大学（京都府京都市）、2016 年 5 月 14 日
⑤ 大久保遼「小さな映像の生態系：ビッグデータ時代における小規模デジタルアーカイブの意義」日本映像学会第 40 回大会、沖縄芸術大学（沖縄県那覇市）、2014 年 6 月 8 日

〔図書〕（計　5 件）
① 大久保遼「社会をつくる映像文化 2」「人類学における映像文化」長谷正人編『映像文化の社会学』有斐閣、2016 年、137-155 頁、195-213 頁
② 大久保遼「映像文化へのアプローチ：遍在するスクリーンのアルケオロジー」石田英敬・吉見俊哉・マイク・フェザーストーン編『デジタル・スタディーズ 3：メディア都市』東京大学出版会、2015 年、83-101 頁
③ 土屋紳一・遠藤みゆき・大久保遼共編著、早稲田大学演劇博物館編『幻燈スライドの博物誌：プロジェクション・メディアの考古学』青弓社、2015 年、184 頁
④ 大久保遼『映像のアルケオロジー：視覚理論・光学メディア・映像文化』青弓社、2015 年、336 頁
⑤ 大久保遼「光学メディア」西垣通・伊藤守編著『よくわかる社会情報学』ミネルヴァ書房、2015 年、37-38 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
研究成果の公開に関わるプロジェクトについては、以下の Web サイトを参照。

- 幻燈展：プロジェクション・メディアの考古学特設サイト
  http://gentou.org/
- 演劇博物館春季企画展　幻燈展：プロジェクション・メディアの考古学
  http://www.waseda.jp/enpaku/ex/2590/
- 演劇博物館　幻燈データベース
  http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/epkgentou/
- 神楽坂で楽しむ「七夕落語と写し絵上映会」記録映像
  https://youtu.be/tyO949hpJFA

６．研究組織
(1)研究代表者
大久保　遼（OKUBO, Ryo）
愛知大学・文学部人文社会学科・特任助教
研究者番号：60713279

(2)研究分担者
なし

研究者番号：

(3)連携研究者
なし

研究者番号：